



Newsletter

NO.6

FEBRUARY 2003



奄美の高倉

この高倉は明治16(1883)年、奄美大島の鹿児島県大島郡大和村恩勝に創建され、昭和34(1959)年に鹿児島県立博物館に寄贈されたものである。鹿児島県立博物館では長年、屋外展示として活用していたが、平成13(2001)年4月9日に不慮の火災に見舞われた。その後、鹿児島大学工学部土田充義教授を中心とする建築学科有志(高倉研)がこれを復元し、鹿児島大学構内農学部門近くに再建された。総合研究博物館は高倉前に看板を設置し、その意義を解説するとともに、今後の管理を担うことになった。

岡崎18号墳第1次発掘調査

岡崎18号墳は、大隅半島の肝属平野に面した台地上に位置します。肝属平野は古墳時代(3世紀半ば頃～7世紀初頭)において前方後円墳を中心とする古墳が築造された南限の地域にあたります。大型前方後円墳を含む唐仁古墳群からは直線距離で3.5kmのところにあります。

この古墳を総合研究博物館 橋本達也が文部科学省科学研究費による研究の一環として、2002年8月28日～9月18日まで発掘調査いたしました。

岡崎古墳群ではすでに、いくつかの古墳が発掘調査され、重要な成果が得られています。18号墳は以前に串良町教育委員会によって調査された岡崎15号墳に隣接し、同古墳群内でも規模が大きく、古墳築造南限域の様相を検討する上で重要な存在であることは推察できました。

まず、今回の調査では18号墳の墳丘規模、墳丘形態、埋葬施設の解明といった基礎的な情報を得ることを目的としました。

古墳の規模と形 発掘調査の結果、この古墳は直径墳丘20m程度の円墳と考えられます。周囲には幅約2.8mほどの周溝がめぐります。また、葺石や埴輪などは確認できませんでした。

埋葬施設 埋葬施設は今回の調査では確認できませんでした。墳頂部で掘り下げを行ったのですが、すでに流失してしまったのか、現在の掘り下げ面より下に存在するのかどちらともいえない状況です。

土器群 今回の調査でもっとも大きな成果は、古墳東南周溝底付近で須恵器と土師器からなる土器群を確認したことです。須恵器(登り窯で焼く朝鮮半島に出自をもつ硬質の土器)は大型の甕が完形品の状態で確認でき、また甕(酒など液体を注ぐつわ)と樽形甕とみられる破片などが出土しました。土師器(窯で焼かない弥生土器に系譜をもつ軟質の土器)では高杯や小型の壺などが出土しています。これらは古墳に伴うもので墳丘外での祭祀に用いられたものとみて良さそうです。須恵器は5世紀前半の土器(TK216型式)で、古墳の年代的な位置づけも確定しました。これによって18号墳が岡崎15号墳の次に築造された古墳であることがわかりました。15号墳と18号墳は1世代か最大でも2世代程度の時間差の内に築造されています。また、この土器群はさらに調査区周辺の空間に広がっているようです。

また、甕は同じ串良町の上小原4号墳(前方後円墳)の周溝部から出土した須恵器甕ときわめてよく似た特徴をもっており、その流通・入手経路や両古墳の被葬者の性格などのさまざまな検討が必要です。

今後の課題 今回の調査では、まだ岡崎18号墳の一部の情報を得たに過ぎません。この古墳の実態を解明するにはさらに調査をする必要があり、第2次発掘調査を2003年2月に行います。



博物館 行事予定

2003年度も2002年度と同様に特別展・市民講座・研究交流会などの企画を行っています。

詳細はあらためて、お知らせさせていただきます。今後ともご協力をお願いいたします。

■発行/2003年2月28日

■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX: 099-285-8141

奄美の高倉復元 Q & A

Q: この「高倉」が鹿児島大学へ来た経緯は？

A: 昭和32(1957)年に奄美大島の和村恩勝の河内 優氏から鹿児島県立博物館へ寄贈され、以来、同博物館に屋外展示されていたものですが、平成13(2001)年4月に不慮の火災にあったのを契機に、工学部建築学科に引き取られていたものです。その後、農学部前に移設、復元しました。

Q: 復元にあたって苦心した点は？

A: 平成13年、工学部建築学科の学生達は、火災現場の焼け跡から、焼け残った材を拾い集め、トラックを借りて大学へ運び込んだのですが、焼けて炭化した木材の表面を削り、部分的には特殊な樹脂を使って修復するなどの苦労がありました。補足材はおもに奄美のイジュ(ツバキ科の樹木)を用い、釘を使わず組み立てました。また、建物の設計図もありませんので、手探りの復元でした。

焼け残った骨組みは復元したものの、屋根を葺く茅をどうするかが問題でした。当初、この高倉の「ふるさと」である大和村から提供いただく話もありましたが、結局、入手できず、知覧町教育委員会に提供いただいた茅で、同町の茅葺技術保存会の皆様の御協力を得て、平成14年11月22日に茅葺きが完成しました。

Q: この高倉の学術的意義は？

A: 高倉とは床を高くした倉のことで、湿気やネズミから収穫した稲を守るために建てられたものです。この高倉は明治16(1883)年に大和村恩勝に泉 富喜久氏が創建されています。これは現存する奄美の高倉としては最古のものと言われています。また、「高倉」は奄美地方のみならず、東南アジア地域にも見られますが、この建物のかたちは奄美地方独特のもので、建築学的、民俗学的にも貴重な文化財です。

要点としては壁がなく、クギを使わず、水平材を棟から降ろした隅木で吊るなどの独特の技法が見られます。柱、梁、隅木などの用材はすべて硬い材質であるイジュです。この材のおかげで焼け残ったのかも知れません。

Q: 今後の管理と利用法は？

A: 今後は総合研究博物館で保守・管理していきます。また民俗学的、建築学的資料として学生の教材として活かすのみならず、地域の文化財として、広く市民の皆さんに公開します。

2002年度後半の活動

■ 10月24日～11月26日

第2回特別展【地球からのめぐみー金ー】

郡元キャンパス総合教育研究棟2F プレゼンテーションホール

■ 11月16日

13:00～14:00 博物館ミニコンサート【金の音色・銀の音色】

<演奏>池田博幸・新名主かおり・和田梨奈(フルーティスト) 有村航平(チェリスト)

14:00～16:00 市民講座【地球からのめぐみー金ー】

<講師>浦島幸世(鹿児島大学名誉教授)

■ 12月3日

第3回生命科学学術講演会共催【発酵と伝統食品】

山元正明(株式会社 河内源一郎商店 代表取締役)

■ 12月9日

第2回研究交流会【アジアのなかの近世陶磁器ーやきものからみた江戸時代の対外交流と薩摩焼ー】

大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館副館長)「やきものからみた江戸時代の対外交流」

渡辺芳郎(鹿児島大学法文学部助教授)「近世薩摩焼の窯構造」



学長挨拶

前鹿児島大学長 田中弘允

「奄美の高倉」の復元式を挙げる運びになりましたことは、誠によるこびにたえないところであります。

この「高倉」は明治16年に大島郡大和村恩勝に創建されていましたが、その後、鹿児島県立博物館へ寄贈され、同博物館の敷地内に屋外展示されていたものです。しかしながら、先年、火災に見舞われ、損傷を受けたことを契機に、同博物館から鹿児島大学へ寄贈され、工学部建築学科の土田教授ら学生諸君や知覧町茅葺き技術保存会の皆様の御尽力によって復元されました。

とくに知覧町教育委員会にはこの「高倉」復元の意義について御理解をいただき、大量の茅(かや)を提供して頂きました。さらに上野秋徳会長をはじめ同町茅葺き技術保存会の会員の皆様には永年伝承されてきた茅葺きの技術で、見事な茅葺きの復元をしていただきました。

この「高倉」は、湿気やネズミ等の被害から籾などの穀物を守るために工夫された奄美諸島独特の建築技法で、民俗学的に貴重な文化財であります。今後、この貴重な文化遺産を末永く保存し、研究と教育に資するとともに、広く市民の皆様にも公開して行く所存です。

本日の高倉復元式を迎えるに至るまでの間、御支援と御協力をいただきました鹿児島県立博物館、知覧町教育委員会ならびに同町茅葺き技術保存会の関係者の

方々、土田充義教授をはじめ工学部建築学科の学生諸君に対し、深く感謝いたします。

この高倉は今後は鹿児島大学総合研究博物館が管理を担当して行きますが、今後もその保存に向けまして皆様方の御支援と御協力をお願い申し上げまして、挨拶といたします。

平成14年12月12日

鹿児島大学長 田中弘允



高倉復元完成式典

平成14年12月12日、高倉完成式典が復元された高倉の前で行われた。式典では学長挨拶ののち、これから高倉を管理する総合研究博物館長が挨拶を行った。そして今回、復元にあたって多大な支援を賜った知覧町茅葺き技術保存会(会長上野秋徳氏)に対して学長より感謝状の贈呈が行われた。



奄美の高倉